

=====
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

=====
AA 研共同利用・共同研究課題「死の人類学再考：変容する現実の人類学的手法による探究」2021年度第4回研究会

日時：2022年3月29日（火）12:30-18:30、3月30日（水）

場所：いろは亭

23月29日（火曜日）

12:30-14:30 土佐桂子（AA研共同研究員、東京外国語大学）

「ミャンマー・コロナを考える：暴力・ガバナンス・SNSを通して知る死」

14:45-16:45 黒田末寿（AA研共同研究員、滋賀県立大学）

「死を引きよせて生きる：臨死の周辺と極限志向」

17:00-18:30 総合討論

3月30日（水曜日）

9:00-12:00「死についてのブレインストーミング」

要旨

2022年3月29日

「ミャンマー・コロナを考える：暴力・ガバナンス・SNSを通して知る死」

土佐桂子

コロナ感染症の拡大を通じて、多くの人々にとって死という現実がさらに身近に経験されると同時に、欧米諸国を中心に、権力が感染抑制という名のもとに個々の身体に働きかけることへの危機感が生じ、いわば「生権力（フーコー）」と個人の権利、自由との葛藤が生じたともいえる。ただ、この議論は、政府がどのような意図であれ、国民の身体に一定の配慮を行うという司牧権力的前提が存在する。一方、政治的混迷状態のコロナ禍で国家権力は国民の身体にどうアプローチするのか。また、ケアの対象は誰なのだろうか。本報告は、2021年2月1日の軍事クーデター以降のミャンマーの事例をもとに、コロナ感染が民主的統治／暴力的統治という対比を可視化する状況について考察するものである。

ミャンマーではコロナ感染に三つの波があった。第一波は2020年3月～8月、第二波は2020年11月～2021年1月、第三波が2021年6月～8月とされる。ただし第二波と第三波のあいだに、クーデターが起こり、選挙で選ばれた国民民主連盟（アウンサン スーチー党首）政権から国家統治評議会政権に代わった。スーチー政権時は、空港封鎖、

検査、隔離施設の建設、ワクチン確保など、市民の寄付を支えに迅速に行い、実際に感染をそれなりに有効に抑えた。一方、第三波はクーデター政権下で生じ、結果的に甚大な被害が出ることとなった。感染拡大の一因はクーデターにより事実上国家のガバナンスが機能していなかったことによる。公務員の多くが「市民的不服従運動（CDM：civil disobedience movement）」に参加し、医療、教育、鉄道運航、紙幣管理等重要な国家機能は停止していた。治療可能な病院での治療は軍人、軍人関係者・支援者に限られ、一般人は自宅での療養を余儀なくされた。もともと医療福祉事業は不十分で、市民たちはそれを補い、コミュニティにも多くの奉仕団体が存在したが、国家の支援がない、あるいは時には攻撃対象とされる状況下では自助努力には限界があった。例えばデルタ株感染により酸素ボンベのニーズが激増し、市民はなんとか確保しようとしたが、軍側は酸素ボンベを没収、購入の列に発砲して解散させるなどした。火葬場への運搬等も市民の奉仕団体が行ったが死者数が多すぎ混乱が生じた。こうした事態に、軍や保健省は全く有効な施策を取れず、感染者、死者数等状況把握すら不十分であった。ミャンマーではコロナ感染症に対する軍側の対応こそが、彼らがいかに一般市民の身体や生に無関心かを明示したと理解され、従来市民的抵抗をためらってきた高齢層が情動的に軍と決別する契機となったといわれる。

一方、クーデターによる情報統制等で市民の情報回路は Facebook などの SNS が主流となった（使用禁止となったが VPN を介して使用）。コロナのほか軍の弾圧による「死」は SNS を通じてシェアされた。アカウントに突然追悼文が掲載され、当人の死を知るという状況も増えたが、特にコロナや軍による攻撃の犠牲者など、いわゆる他者の死についても、詳細な情報が共有されるようになり、悲しみをリアルに共有する契機となる。非常時における SNS を通じての死の表現や追悼のありようはさらに研究を続ける必要があるだろう。

「死を引きよせて生きる-臨死の周辺と極限志向」

黒田末寿

1) 人間はしばしば死ぬかもしれない過酷な状況に進んで身を投じる。何故このようなことをするのかという動機については、当事者が置かれた立場によるところが大きい多様な広がりがある。たとえば、戦争・宗教・武術・抵抗運動などがある。過酷な状況、極限状態に身を投じる人間は、特別な能力をもった者に限らない。戦争ではごく普通の人間が飢え・渇き・疲労・不眠・極度に心理的な抑圧といった過酷な状況で闘う。むしろ、受動的にこのような状況に曝される場合も数知れない。

他方で過酷な状況に耐える人たちを見ると、その動機はべつにして、人間はストレスに格別に強い動物であるという感をもつ。多くのヒト以外の霊長類、とくに野生の大型類人猿は捕獲や檻に閉じ込められるとパニック状態になり下痢をして脱水と内臓の多機能不全を起こして死ぬことが知られている（黒田 2020）。もちろん、すべてに人間が

ストレスに格別強いわけではないが、平均的にはそうであり、そしてなかには死と隣り合わせの訓練によってその能力を高め、感覚・身体能力・認識のトランスフォームを成し遂げる人たちがいる。

比較的よく知られている例は、宗教者の修行である。今回は藤田庄市『行とは何か』(1997)に依拠して比叡山の延暦寺の僧が行う回峰行と大護摩供で何が起きているのかを紹介する。これらは、いわば死を覚悟して他者の念願成就を祈る行であるが、その前半はその資格を獲得するための自己研鑽の行と位置づけられている。

2) 回峰行

深夜に起床、勤行、素足に草鞋で2時に出発。真言を唱えながら比叡山内から日吉大社まで約300箇所、約600の神仏を礼拝、30kmを6時間で巡拝。休日なし。出発点の無動寺谷に戻ったあとも午前・午後の勤行、シキミ採り、洗濯、札づくり、事務の輪番などがあり、睡眠時間は3時間。

浄衣(白装束) + 自害用の四手紐(死出紐=首吊り用) と短剣+三途の川の渡し賃六文銭+葬儀代を携帯=続けられなくなったら自害せよの意。

単独行だが千日回峰の最終段階では補助僧が支えをすることもある。

千日回峰行は、勤行と回峰を7年間にわたって行う。1~3年目は年に連続100日、4~5年目は年に連続200日。3年目から足袋をはく。5百日後に杖と百帯袈裟をまとい、他の人への祈り=加持を許される。

5年700日の満行後、堂入り=明王堂参籠の行が入る。生き葬式をして明王堂で足かけ9日間ろうそくの光のみで断食・断水・断眠・断臥(+断言)の4無行。不動明王の真言を唱え続け(10万回)、毎晩、深夜2時に近くの閻伽(あか)井で閻伽水を汲み、不動明王にそなえる。堂入り満了で行者は生身の不動明王となり、信者の合掌で迎えられる。これを機に行者は自分のための自利行から、衆生救済の利他行に入る。

6年目にこれまでの行程に京都の赤山禅院への往復=赤山苦行を加え、1日約60kmの行程を100日続ける。

7年目には200日。はじめの100日は2日かけて全行程84kmにおよぶ京都大回り、後半100日は比叡山中30kmの行程に戻る。

百日回峰行時の筒井叡観師の心身の変化

リズムカルな動きになり脚の草鞋傷が癒える。3時間睡眠になれ、目が澄んでくる。山中での警戒心がうすれ童心に返り、寺院の彫刻や自然の移り変わりに細やかに気づくようになる。余裕から歩きながら眠るようになり、木にぶつかり谷に落ちることも出てくる。

堂入り時の心身の変化(澄道師):3,4日目に落ち着いてきて座禅の境地に近づいた。5日目につばが出なくなる。7日目に皮膚呼吸の感覚になって肌を拵げたくなった。感覚が研ぎ澄まされる。

3) 大護摩供

10万枚の護摩木焚きを7日半で断食・断水・不眠（＋不臥）で行う。

行に入る前に100日間の前行：穀断ち（ソバは食べてよい）・不動明王への護摩焚き、墓穴を掘り生き葬式を行う。

本行＝焼き地獄とも。

護摩の炉は直径48cm、炉から半メートルほどに座って護摩木の祈願者名と祈願内容を読み上げ放り込む。修法は6回/日。午前1時から2時間ずつ、2時間おく。21時から23時の護摩焚きで1日を終了。休み時間は裏堂で正座し読経。

1回の護摩は3000-4000枚、後半で弱ってきて2000-2500枚。炉から半メートルほどの行者付近は炎が上がると50度以上。

筒井師は天井を焦がす炎のときにも身じろぎもせず2秒ほどで護摩を読み上げ炉にくべ、8日間で11万600枚の護摩木を焚いた。

大護摩供行時の筒井叡観師心身の変化

護摩の猛火に熱さを感じず、裏堂の寒さも感じず、空腹・渇き・眠気も催さなかった。渇水感は1度だけあった。

精神的にはおだやかで時間感覚も無く、終わったときの実感もなかった。

本行1日目：最初の3回は普通にびしょり汗をかき、小水もわずかにあったが、熱さは感じていない。1回の修法後、堂外で呼吸するときは生き返ったように感じた。

2日目：夕方から汗が出なくなった。排泄もなくなった。胃弱者のような口臭がでた。渇水感が1度出たが以後無くなった。

3日目からうがいが許されるが、飲んではならない。吐く水を測って管理される。口内が白く、唇が変色し割れる。踵が割れ、足袋が緩くなり、死人のような顔色になる。

4日目：支えられないと立てず、5日目に抱きかかえられないと歩けないが、檀上ではしゃつきとする。指もひび割れ、護摩木が炉に届かないこともあった。痩せ、尾てい骨辺りに血がにじむ。死臭を発する。

侍僧：「研ぎ澄まされ、じっと見通すような異様なほど鋭い目。人間の魂と身体が分離するとはこういうことか」

この姿にふれて、まわりの檀家や僧の態度が真剣になってくる

筒井師の感覚が研ぎ澄まされる。瞳孔が開きっぱなしでまぶしい。近眼だが眼鏡なしで護摩木の文字や10mほど離れている煙の中の不動明王がはっきり見えた。護摩の火の音、ろうそくの音を聞き、遠くの声で何人来ているかも当てた。嗅覚・味覚にも変化。傍にいる僧や檀徒がどういう気持ちでいるのかもわかった。

人生観が変わった。人に生かされている実感が（心から）わかった。参拝者たちの真言に感動し、感謝の涙が湧き、気力が喚起された。大護摩供のなかにいることがうれしく、楽しかった。

4) 生かされている実感

大護摩供で筒井師にわき上がった人に生かされている実感や参拝者たちへの感動・感

謝、うれしさ等の心境は、回峰行で経験している。筒井師は回峰行の心得として先達の澄道師から、「お不動さんにおまかせしなさい。自分がやっていると思うな。あわてるな、…。つまりいたとしても道の石ころに感謝し、拝め。…」と言われている。これは山の歩きのリズムを崩さずパニックに陥らない心得で、それによって体力の消耗を防ぎ行に向かう心を維持することができる。と同時に、この心得には主体の過剰な意識を排除する方法が込められている。行の目的は仏の存在を感じ、そのありがたさが他者に自ずと伝わる力を得ることと、思われる。それはそうなるように自己を仏にゆだねることではできないことであるが、その到来はむずかしい。心得は、石ころひとつにも自己以上の重みがあると感じること、つまりいてもそれを過剰な自己意識を消す契機であると謙虚に思う、そのような心の有り様の積み重ねが仏に近づける方法と言っているように思われる。上記の行は、そういう感覚が心身から湧きあがってくるのを待ち望んで、死と紙一重になる心身状態に肉体を追い込んでいる。しかし、過酷な行はそれに耐えうる心身をつくる前行や心理の安定（＝まかせる心）を図る心得など合理的な対応策を含んでいることも見逃してはならない。

2022年3月30日

「死についてのブレインストーミング」

「死の人類学」についての、新たな研究動向と現実社会の動向をふまえて、『死の人類学事典』（仮）の企画のためにブレインストーミングを開始した。第1回目は、まずは、どのような方向性をめざして考えるのかについて意見を出し合った。次年度にむけて引き続き検討を行うこととした。